

第六章 門限

1.

夕方になるまで母親は保護者会から帰ってこなかったため、月曜はオレの一日天下、ぼやぼやとパジャマ姿のままいつまでも過ごしていたら、昼過ぎになって元氣よく双葉が来訪した。

またしても呆れられる状態を見られ、オレは絶望した。が、双葉の方はもう慣れたもので、

『かわいいパジャマだね。見せて』

と言つて、オレのネコ着ぐるみパジャマをあちこち触ってきた。

いや。あの、言い訳させて欲しい。オレだつてこんなパジャマ着たいわけじゃない。オレも男だ。季節を問わず裸で寝るくらいがふさわしい。けれどパジャマを買ってくるのは母親、正確に言えばその買物についていた姉貴であつて、その結果、いずれもファンシー乙女趣味全開のものばかりになるのである。しかもオレにフード付きの服が似合うと長年思いこんでいる姉貴はわざわざそんなのを選んで買ってくる。加えて昨晩は結構冷え込むという話だったので、このあつたかい着ぐるみパジャマがいいと思つたのだ。それだけだ。

昨日の部屋での謎の行動はどこへやら、やけにこのパジャマが気に入つたらしい双葉は、オレのネコミミやらヒゲやら腹やら背中やらしつぽやらないじりまわしてくる。いつものごとく照れがない。オレたち以外誰もいない家のリヴィングで、延々こんなじゃれ合いが続いた。

オレは当然パジャマの下にはパンツしか穿いていないので、双葉の身体と触れ合うのもほぼ直接、布一枚越しの素肌、その柔らかい感触は平時の数段上に行く。

それでこちらがボーツとしていると、双葉はふと身体を離して尋ねてきた。

『これ、あつたかい？』

うん、とつても。

着替え損ねたままのオレは、双葉とこの日も喋り、遊び、その間はオレ

もイヤなことは忘れていた。双葉にゼロミコ打ち切られたなんて話できるわけないし。

ただ……パジャマの話が終わった後の双葉は、またどことなく、態度が不自然になったような気がした。そわそわしているというか、落ち着かないというか。時折表情が自信なさげにすら見えて、オレも心配になる。双葉のこんな顔、十何年間で一度も見ただことない。

どうかしたの、と訊くと何か言いたげにはするのだが、最後にはごまかすように、別にどうってことない話を始めてしまう。

結局夕方帰るときまで、双葉は少しだけこちないままだった。

2.

そして今日。火曜。

今オレは、学校でぐったりしている。双葉原因の心配と不安をきっかけに、連鎖してゼロミコショックが再燃しただけだ。はく。ぐだぐだぐだとして、力がまるで出ない。

「神志那くん！」

そんなオレの背中に飛んできたのは、速水さんの一直線な声だった。机に突っ伏した顔をちよつとだけずらして、オレは彼女のものすごくブレのない瞳をまじまじと見つめた。

「……なあに」

「どうかしたの？ 元気ないけど。ひよつとして保護者会で怒られたとか……まさかね！ 神志那くん成績いいもん。じゃあ、何かあった？ もしかして前みたいにな、変な噂が流れてるとか？ そんなことあったらすぐあたしに言っつて。何とかするから。そうじゃなくても何でも相談に乗るわ」

アルプススタンドから叫ぶチアガールぐらい声が大きい。こんな至近距離から早口で応援されると、マシンガンを持って笑顔で脅されているような不気味な圧迫感を覚える。変な噂事件ね。そんなこともあったね。

そうして見ていたら、突然速水さんの態度がころりと変わった。顔を紅潮させ目を伏せがちにしスカートの裾をいじって、美少女ゲー終盤のヒロインのようにもじもじもじし始める。

「あ、あのね、神志那くん、あたし、お願いがあるんだけど」

「……なあに」

「神志那くんのこと……愛くんって、呼んでもいいかな」

「へ？」

「なんでだ？ 話の脈絡が分からん。」

「まあ……呼びたきゃどうぞ」

他の女子なんかみんなあいちー呼ばわりしているのだから、今さら大したことじゃない。くん付けしてくれているだけマシだ。なのに速水さんは、人生の転機でも訪れたかのごとく目を輝かせ、それからそれをごまかすように周囲ぐるりを見回しながら、一歩ずつオレに近寄ってくる。

そして、背後からそっとオレの首に手を回すと、彼女は遠慮がちに身体をくっつけてきた。

「……愛くんが今何に悩んでいるのか、あたし、知りたいな」

「……うーん。」

シチュとしては悪くない。他意はないにしろトップクラス美少女がオレにひつついているわけだし。でもなあ、知りたいって言われても。お気に入りの深夜アニメが打ち切られて鬱です、なんてカミングアウト困難だし。どうも気が乗らない。

それに、昨日の今日でこれくらいのスキンシップじゃそんなにどぎまぎしないというか。双葉の方がもっと押しつけるように積極的だし、昨日のパジャマ越しと比べて学ラン布厚いからイマイチだし、そもそも速水さん、双葉ほどは胸ないし。

というか、

「速水さん、何がしたいの？」

終夜のこともそうだけど、こんなにクラスメートの心配ばかりしなくても。

速水さんは一瞬びくりと反応した後、妙に色っぽい声で言った。

「……倫、って、呼んで」

「いやあ、それはちょっと」

オレは苦笑して断った。

「悪いっていうか……呼びにくいよ。ほら、オレまだ速水さんのことよく

知らないじゃん。女子のこと下の名前で呼び捨てにするのって、中学にもなると相当親しくないと難しいし……だから無理だよ。幼なじみとかだと平気なんだけど」

「……そういう娘、いるの？」

「え？ まあ」

話は終わったのに、速水さんはなかなか離れてくれない。オレの首にも腕が巻き付いたままだし、何だか暑苦しい。気づけば、微妙にクラスの連中の注目を集めていてイヤな感じだ。当然ながら速水さんは妄想が主食の男子連中憧れの的なので、オレとしても無駄な嫉妬は受けたくないのである。

「速水さん？」

段々腕がすっかり巻き付いてきて離れそうもなくなってきたので、オレは若干強めに言った。よくこうやってオレは、女の子に抱き枕として利用されるのだ。

その声を聞いた速水さんはハッと飛び退くと、頭を搔いてかわいらしく笑った。その姿を見ながら、オレは一つ気になっていたことを尋ねた。

「そういえば速水さん、終夜の方はどう？」

今朝方から終夜の周りから彼女の影が消えたので、いい加減諦めたのかと思っていた。

すると速水さんは、数度パチパチと瞬きをする。

「……よすがら？」

そう言われて、あ、とオレは口を押さえた。つい呼び捨てにしてしまった。変に勘ぐられると面倒だから、クラス内では一応さん付けを保っていたのである。

「瑞歩ちゃんなら先週、友達ならいるからもう付きまとうな、って言われて、それでもういいのかなって思ってたんだけど……愛くんなの？ その、友達って」

「あー……たぶんそう、かな」

終夜がオレのことを何だと思っているのかは不明だが。

「あの、でも、さっき言った幼なじみっていうのは別人だよ」

「ふうん」

それだけ聞くと、速水さんにはっこりと笑みをこぼした。
そして、揺れるようにして、どこかへ行ってしまった。

オレは彼女の後ろ姿を見ながら、ふう、とようやく息をつく。これで再び心置きなく、深夜アニメと幼なじみについて頭を悩ますことが出来る。そうだ。一体全体双葉は、どうしてしまったのだろうか。

とにかく、困ったり苦しんだりしている双葉は見たくないのだ。双葉の悩みはオレが解決しよう。そのためなら何でもする。間違っても他の奴にこのポジションを渡してなるものか。

双葉はいつでも、ただ楽しく幸せそうに笑っていてさえくれれば、それでいい。

3.

「……お前何にも分かってねえなあ」

「はあ？」

グラサン掛けた不良のため息混じりにそう言われ、オレは眉を顰めて問い返した。

速水さんと別れた後も結局放課後までグダグダし続けて、そのまま五時頃になってからオレは帰宅した。すると、終夜様からメールで「暇だ」という簡素な招集が掛けられたのである。家で独りでいたところでのいいことなど何もない。そういうわけで、「早めに帰ってきなさいよ」と言う母親に生返事してから、急いでオレは出動した。

そして今、オレたちは例によって、あの商店街を歩きながら会話しているのである。心配だった双葉は今オレの目の前で、外見上は何ということもなく機嫌良さげに、終夜と並んでいる。

だが……その服装には目を見張った。

双葉らしくない、えらく少年風のアッシュオンだった。頭には野球帽、服はチェックの上着の下にロゴ入りTシャツ、下はジーパンにスニーカー。スタイルが抜群にいいものだから滅茶苦茶似合っている。長い黒髪がちぐはぐに感じられる辺りがまた逆にたまらない。しかし、一体どうしたのだろうか。

終夜もすごかった。もう、超ショートのミニスカ。制服以外のスカート姿は初めて見るのだが、いきなり過激すぎる。絶対領域広すぎ。全体もブラック路線を突き進み小悪魔系ここに極まりで、コイツのお粗末な体格・体型で言うのもなんだが、やたらと……エロい。

「鬨いは白熱してんな。まあ、それはいい。目の保養だ。それよりもお前、まだ夢見てんだろ」

「何がだよ。はっきり言ってよ」

「保護者気取ってんな、つつてんだよ。オレは双葉のために、オレが、オレが、って、要するに保護したい、独占したいってことだろ。押しつけがましい。上から物言ってんじゃねえよ」

「そんなつもりは……」

「無意識だとしたらなお問題じゃねえか」

「すげなく返すレイオウにカチンと来て、嫌味の一つも言いたくなる。」

「……昨日丸一日凹んでたくせに」

言った途端にグラサン越しに殺意の籠もった目で睨まれたので、オレは急いでゴメンナサイと呟いた。ゼロミコのことをいくらメールしても返信がないからどうかしたのかと思っていたが、まさか本当に凹んでいたとは。かわいそうだから、名前の話題は持ち出さしないでやろう。

しかしオレがこんなことを言ったのも、自分の中の動揺をごまかしたいからだった。

レイオウの言うとおりでと思ったのだ。

押しつけ。まさにその通りだ。保護したい守りたいコントロールしたいという、要は独占欲に過ぎない。優しくするように見せて、その実、双葉のことを自分の思い通りにしたいだけだ。そんなの誰も望まないのは、分り切ってる。

「……でもそれなら、どうすればいいんだよ」

オレがブツブツ呟くと、レイオウは肩をすくめて簡潔に応じた。

「あの娘のことが大切なら、それならむしろ、自由にしてやればいいじゃねえか。縛り付けようとするとから無理が来る。単純な話だろ」

「……いや、それは、そうだけど。……いや、それは、そうだけど。……いや、それは、そうだけど。……いや、それは、そうだけど。」

何だか、素直には受け入れがたかった。

確かにレイオウの言うとおり、万事をオレの思い通りにしようなんて思うから、いちいち双葉のことでパニックを起こし、頭を悩ます羽目になるのだ。双葉だってバカじゃないのだから、ちよつとくらいのことでどうにかなったりはしないだろう。オタク関係に興味を持つのが、終夜との間に何が起ころうが、必要以上に案じることはない。それが道理だ。

放っておいてやればいい。好きにさせておけばいい。理屈では、それが正しいとオレにも分かる。

……でも。

でもやっぱり、オレは双葉に干渉したくなる。

保護者気取ってるって詰なられようが鼻で笑われようが、オレは双葉を、守ってやりたくなる。

そして……仕舞いには、管コントロール理したくなってしまふのだ。

なぜだろう。

どうしてなんだろう。

双葉の軽やかな後ろ姿を見つめながら、それでもオレは、答えが分からなかった。

4.

そんなことをウジウジと考えながら、オレはみんなの後に続いて、手近なオタ専本屋へと入っていった。

別に何を買おうと思っていたわけでもない。ただ何となくみんなと一緒にいれば、思い悩まずに済む気がただけだ。オレは気づかれないようチラリと双葉の顔を見てから、意味もなくなため息をついた。段々自分がイヤになってくる。

そうして、もう一度顔を上げた瞬間、

「あれ……?」

オレはふと、違和感を感じた。

『何だか……ここ、雰囲気変わったね』

双葉も言う。そうだ。何度も来たことのあるよく知った店だが、何か

違っている。日曜のゼロミコ事件から続く漠然とした胸騒ぎをまた感じながら、オレは本棚の合間を歩く。そうして、ついにその疑問の答を見つけた。

本棚の配置、レイアウトが、全体的に変化しているのだ。

しかも、一般向けのエンタメ小説とか雑誌とか児童書とかのコーナーばかりが前面に押し出され、一方マンガやライトノベル、ゲームの攻略本なんかは、店内の隅の方へごちゃごちゃと押し込められるように移動させられている。前来たときには、それらが堂々と店の中核に据えられていたのに。

久しく新刊の出ていなかった『れつつ☆おーくしょん！』なんか、そんな山の中に埋もれて、どこかへ消え失せていた。

これが普通の本屋ならまだ分かる。しかしここは、我らがキワモノ商店街の中にあるのだ。本来そうしたものたちこそが、店先にずらりと並べられるべきところである。

それなのに。

写真集にアニメ専門誌、設定資料画集みたいなものまで雑多に、他の棚になんとか隠れるよう、位置が変えられている。種類や量だけは一朝一夕に減らすことは出来ないのだから、投げやりに密度ばかりが異様に高く、傍目にはほとんどカオス空間だった。

「……PTA推薦図書『星がやさしく笑う夜』」

終夜の薄暗い声が聞こえる方を見れば、そこにあるのは爽やかな色合いのポスターが貼られた、PTA推薦図書ブースだった。店中央の広い面積を、どすんと占拠している。ミニスカの小悪魔は、不似合いな若者向け軽装文芸書の表紙をぺたぺたと叩いていた。

「各書店このコーナーを設けることがキョーイクンショウ教育省から推奨されている、と昨日ニュースで言っていた。『科学者から未来を生きる君たちへの伝言』、『分かりやすい論語』、『地球村のなかま』」

終夜は平積みで丁重に並べられている本のタイトルを、順繰りに挙げていく。ブースには同じ本が何冊も何冊も、アホかというほど高く積み上げられている。睡眠導入剤に役立ちそうなものばかりだ。

「……ニュースでは、強制的ではないと言っていたが」

「ほら見るよ、愛」

レイオウはマンガを一冊持ってきた。『邪神降臨』の第一巻だ。掛けられたヴィニルカバーの上には、無造作に丸いシール。

赤いゴシック体で「警告」と太書きしてある。その下には読みやすい、人を食ったような文字が連なっていた。レイオウが読み上げる。

『この本はお子様に悪い影響を及ぼす危険性があります。ご注意ください』。教育委員会・全国PTA連合共同審議会』だとさ」

何だよそれ。そんなシール見たことないぞ。そりゃ確かにこのマンガには多少の暴力描写はあるが、指導を受けるほど大袈裟なものではなかったはずだ。

見回してみれば、他のいくつかのマンガやラノベにも同じシールがべったりべったりと貼り付けてある。もうそれだけで買う気が失せる。

『これって……愛くんが持つてるマンガだよね？ この間読ませてくれた』肩を叩いた双葉が指す本棚には、小さなチラシがテープで貼り付けてあった。数年前に完結した、オレの大好きだったマンガの懐かしいロゴが載せてあり、その下にはやる気なげな文体で、こんな途方もないことが書いてある。

「当時は現在の観点から鑑みて、青少年が見るにふさわしくない性的な表現が多用されていると考えられることから、著作者との協議の結果、当を一時回収させていただくことに」

……冗談だろ？

元々過激なエロ描写で人気が出たマンガではあるけれど、それにしたって週刊少年誌に載ってたものだからMAXでも今は無きパンチラ胸チラ程度、たかが知れている。

オレがこの手のマンガに初めて胸ときめかせた、思い出の作品なのに。信じられない。おとといのゼロミコの時、感じた衝撃が甦る。

オレの大切なものを、全て否定された気がする。軽い立ち眩みを覚えたオレは、無意識のうちにふらふらと店から出ていた。

そして……この時になって初めてオレは、ようやく愕然とした。

気づけば見渡す限り、これまでではありえない異様な光景が、商店街に

広がっていたのである。

双葉と初めて来たときは貼り巡らしてあった美少女ポスター、宣伝用ポ
ップ、駅前には並ぶ売り子のメイドさん、店頭モニタに映るアニメ、聞こえ
てくるアニソン、ゲームの体験版。

その他オレの心を躍らせるものたち。

全てが、一斉に姿を消していた。

「愛！ 待てよ！」

レイオウたちが駆け寄ってくる。周囲を見ながら行くあてもなく歩いて
いるうちに、いつの間にかさっきの書店からずいぶん離れてしまっていた
ようだった。三人とも、辺りに漂う茫漠とした不安からか、暗い表情を浮
かべていた。

商店街をしばらく歩きまわって、一体何が起きたのかをオレはこの目で
はつきりと見た。

コスプレ衣装の専門店に灯りはなく、メイド喫茶は休業中。書店という
書店の店先にはグラビアどころか美少女イラストが表紙のマンガ雑誌すら
見当たらず、CDショップは退屈なJポップをぐだぐだと流し、DVDは
しつとりしたお涙ちょうだい時代劇の日本映画をプッシュ。ゲーム店には
携帯ゲーム機用の大人向け教養系ソフトがずらり、双葉言うところの大人
の着せ替え人形も、あれだけ並べてあったショウウィンドウから一掃され
ている。

そして、あのスプラッタ映画館も、臨時休業していた。

「……くそつたれ」

終夜はハードボイルドにそう言って、映画館前の立て看板を蹴り飛ばす。
安普請の金属板は、くわんくわんくわんと間の抜けた音を立てた。

何もかもが平凡以下になり下がった生気のない荒涼たる商店街を隈無く
見てまわった頃には、日も落ちて辺りはすっかり暗くなっていた。

レイオウはニヒルに笑いで、オレを見た。

「新制PC法スタートを期に、みんな揃って自主規制、か」
何だよ、自主規制って。

そうだ。P.C法には一方的な法的拘束力はないのだ。必ず、保護者による判断が、行使されるか否かの基準になる。親に、保護者に、大人たちに認められた、権利だ。

しかしそれは逆に何よりも強い、全ての人に対する心理的な拘束になる。行使されるかどうか分からない力は、必ず行使される力よりもむしろ、強いのだ。

考え込んだオレを見て、レイオウは言った。

「……どうする？」

「どうするって……」

どうすることも、出来ない。

その辺を当惑した面持ちで往来しているオレのお仲間たちも、同じ気持ちだろう。出来ることなら、こんな横暴許すまじ、と叫んで反乱でも起こしたい気分だ。

でも。

そんなこと出来ない。出来るわけがない。どこそのマンガや、ジュヴナイル小説じゃないんだから。

徹底して保護されてきたオレたちからは、闘いや革命を起こす気力なんか、端から奪われている。

『ねえ愛くん。なんでみんななくなっちゃったの？』

双葉が手話で尋ねてくる。本当に分からないようだった。どう応えればいいか、オレには分からない。無理矢理オレはこう答えた。

『……よくないもの、だからじゃない？』

『なんで？ 私が見ても変なところなんて全然なかったよ。ちよっとおっぱいが大きかったり、パンツが見えてたり、かわいい女の子の絵が描いてあったり、それだけでしょ？ なんでそれがよくないものになっちゃうの？ 誰も何とも思ってたじゃない？』

『子どもがどう思うかなんて、どうだっていいんだよ』

何がよくて何がよくないかは、みんな大人が決める。

子どもはその決定に柔順に従い、おとなしく保護されていればいい。

「……何様のつもりだ」

終夜は、冷え切った声を洩らした。

「保護者様だろ。決まってんじやねえか。優しいパパとママが、いいものだけを選んで与えてくれて、よくないものは事前によけてくれんだ……嬉しくて涙が出るな」

レイオウがにやにや笑いながら応じる。けれどその眼はサングラスに隠されていて、心で何を思っているかまでは窺えなかった。

オレはそつと、呟いた。

「……ふざけるな」

そして、その言葉と同時に。

突然耳をつんざく大きなサイレンが、辺りに鳴り渡った。

5.

煌々とした赤い回転ランプが、商店街を盛大に照らし出す。

緊迫した空気の中、何事が起きたのかとオレたちは周囲を見回す。誰かがまたエロ本でも買ったか。親の指示した移動範囲を越えたか。それとも、保護員のお話から逃げ出しでもしたか。なんでもいい。よく分かんが、大人の気に入らないことをやったのだろう。

ほら来た。あちこちの角や店の中から白服の保護員たちが現れた。悪鬼のごとき形相で走ってきた。肩を落としたオタクたちを脇へ斥け蹴散らして、彼らはまっすぐ、悪い子を捕まえにやって来る。何の疑問も持つことなく、迷わずまっすぐに、

こちらへ。

『……逃げろ！』

双葉にそう言うやいなや、オレたちは、猛ダッシュで逃げ出した。

何故かは分からないが、保護員たちが追っているのは、

『オレたちだ！』

全く意味が分からない。今日はオレたちは何もしていない。何も買っていないし何も観ていないし、保護員たちの不興を買うようなことは一切していない。それとも、オレらが大人の悪口言っていたからなのか？ そんなので捕まってしまうような世の中になったのか？

必死でオレたちは走る。双葉が走りやすい格好でよかった。運動神経の

鈍そうな終夜も、スカートを気にも留めずに必死で走っている。チラチラと何かが見えても気にしてる場合じゃない。レイオウは、風を切るように駆けていた。

すると、追っ手の一人がこんなことを叫んだ。

「こら待ちなさい！ 神志那愛！」

……オレ!?

オレは青ざめた。パニック状態だ。咎められるようなことは何もしてないのに。しかし連中は、オレの名前を親の仇のように連呼している。

どうして、どうしてだ!?

「終夜、逃げ場はないのか!？」

前こんなことになったときの唯一の助けに、オレは継^{すが}ろうとする。だが終夜は、首を横に振った。

「ない。なくなった。新法施行と同時にPCシステムが増築されて、探知不能なエリアがほぼ皆無になった。どこへ行っても確実に見つかる」

ちくしよう。

オレたちは走り続けた。どこまで行っても保護^{ホゴウ}員たちはしつこく追ってくる。明らかに前よりも人数が増え、誰かが疲れてもすぐ代わりが現れる。行く先々にも区別つかないほど同じ面をした、正義の執行者気取りのオッサンオバサンがぞろぞろと待ち構えている。悪夢だ。

細い角を曲がり、

塀と塀との合間をすり抜け、

見たこともない路地に入り込んで、オレたちは逃げる。

隣を走る双葉の息が、切れている。

それを見てオレは、たとえようもなく辛くなった。

理由も分からないまま逃げる。

逃げる。

逃げる。

けれど、もう無理だ。

そしてオレたちは、ゆうに百人を超す保護^{ホゴウ}員たちに取り囲まれて、あえ

なく御用となった。

疲れ切つてへたり込むオレたち。嘲笑しているであろう保護員ホゴインの顔が、逆光で見えないのが幸いだ。歯を食いしばって悔しさに耐えた。そばにあった双葉の手を握り、オレは何も言えない。

すると、オレの前に一人のオバサンが立ちはだかった。

ああ、コイツ。前にオレに職質をかけてきた、あのイヤミな奴だ。

これぞ至上の喜び、といったサデイステイックな笑みを浮かべ、オバサンはワインの名でも読み上げるかのようにゆっくりと、こう言った。

「……門限モンゲンです」

6.

それから後は、早かった。

現場にはそれぞれの親（終夜は袴原さん）が呼び出され、学校の担任教師まで何の用があるのか知らないが登場し、さらにはどさくさ紛れに警察官まで集結して騒然となる中、彼らは口々に、無駄な言葉を吐いていた。

いわく、うちの子がご迷惑をおかけして申し訳ありません、いえいえ私の指導力不足で、お母さんにもすっかり言っていたみたいですな、門限モンゲンは設定なさった以上きちんと守っていたきたい、どうのこうの。そしてお互い、しきりにペコペコと頭を下げる。後はそのリピート。

オレたちは親の背後に隠されて、何を言おうとしても無視され、睨まれるばかりだった。

どうやら知らないうちに、オレに、門限モンゲン午後七時半が設定されていたらしい。

それにしただって。

門限モンゲンって何だよ。そんなのオレ一言も聞いてないぞ。確かに出かける前に妙に早く帰れと母親が繰り返言っていた気はするけど。今までだって、ずっと門限モンゲンシステムなんか利用してなかったくせに。何で今さらそんなことするんだよ、母さん。

親に向かって言い訳したいわけじゃない。

せめてそんなことを双葉や、終夜やレイオウに伝えたかっただけだ。

けれど、親と保護員^{ホゴイン}によって引き離されたせいで、何一つ言うことは叶わなかった。

オレを捕まえた保護員^{ホゴイン}は得意げな表情で、お子様の教育方針を見直された方がよろしいんじゃないやありませんか、とオレの母親に向かつて言っていた。母親は、平謝りに謝るばかりだった。こういうお友達とおつきあいさせるのはどうかと思いますけど、とも保護員^{ホゴイン}は言った。ぶん殴りたくなっただけれど、後ろにいた知らない誰かに無理矢理取り押さえられた。

何が、どうかと思いますけど、だ。

親に友達選ばれてたまるか。

その後オレたちは、各々の親に連れられて、家に帰ることになった。

帰り際、振り向き様に双葉と目が合った。

何か言おうとしたけれど、どちらも親に片手を掴まれていて、何も言うことが出来なかった。

†

教育委員会^{キョウイクイインカイ}からの敕命^{キツメイ}によって、翌日まで自宅謹慎^{キケン}となった。家で腐り続けているオレの元に翌水曜の夕方、教育委から速達^{ソクダツ}が届いたのは、へらへら笑った男の子と女の子のイラストが表に描いてある封筒^{フウキョウ}に入れられた、こんな通達書^{ツウダツショ}だった。

「大切な、あなたのために

今回^{こんかい}あなたは、保護者^{ほごしや}の方が決めてくださった門限^{もんげん}を、守ることができませんでした。このことに保護者^{ほごしや}の方は、とても胸^{むね}を痛めていらつしやるでしょう。あなたは、ルール^{ルール}を守れなかったのです。これは、絶対^{ぜったい}にしてはいけない、悪い^{わる}ことです。

私たちは、あなたと、あなたのおともだちの保護者^{ほごしや}の方^{かた}とよく相談^{そうだん}をして、これからあなたが、こんな悪い^{わる}ことをした三人^{さんにん}のおともだちと、成人^{せいじん}する(二十歳^{にじゆっさい}になる)までのあいだ会うことができないことに決めました。残念^{ざんねん}ですが、これは法律^{ほうりつ}で決ま^きまっていることなので、逆^{さか}らうことはできません。携帯電話^{けいたいでんわ}でも、連絡^{れんらく}を取ることはできません。

おともだちと会えなくなるのは、悲しいことでしょう。ですが、これらすべて、あなたのためを思っおもて、やっているのです。いつかきつとあなたも、保護者ほごしやの方に感謝かんしやするときに来るここ」

オレは通達書を握りつぶすと、拳で机を殴りつけた。

7.

「倫のクラスに、神志那愛くん、という男の子がいるのかな？」

夕食の席で父親に問われて、倫は驚き、顔を上げた。

「ええ、いるわ。今日は学校、お休みしてたけど……どうかしたの？」

「いや……昨日、親御さんが決めた門限を過ぎてしまったそうだな。しかも保護員から逃げ回り続けて、駅前の商店街で大騒ぎになったんだ。それで、担当職員が親御さんと話をして、新P.C法の親交関係干渉を適用した。よくない友達から引き離すことにしたんだそうだ」

それを聞いて倫は、胸が高鳴るのを感じた。

母親は顔をしかめる。

「まあ……そんな子がクラスにいるの？ 信じられないわねえ。ねえあなた、その子が倫に近づけないようには出来ないの？ キャンプへ送るとか……危ないんじゃない？」

「お母さん！ 愛くんはそんな子じゃないわ！ とつても優しくて、素敵な子なのよ！ きつとそのお友達にたぶらかされて、それでそんなことになっただけよ！」

一生懸命に弁護する倫を見て、父親は微笑んだ。

「ずいぶん倫はその神志那くんに、ご執心のようだね」

「そ……そんなこと、ないわ、ただ愛くんは、仲のいい、お友達だから、その……」

「ふふふ。まあいいさ。どんな子なのかは知らないが、倫がそれだけ言うんだ、さぞかしい子なんだろう。それなら倫が彼を、更生と言っちゃ大袈裟だが、いい方へ向けてあげればいいんじゃないかな。導いてあげるんだ」

父のそんな言葉を聞いて、倫は目を輝かせた。
「うん！ お父さん、あたしそうするわ！」

†

夕食を終えてから、倫は鼻唄を歌いながら自分の部屋に戻った。この上ない幸福感に浸っていた。

愛くんが、悪いお友達から引き離された。そのことが、倫は何よりも嬉しかった。きっと、下の名前で呼び合う幼なじみの女の子というのも、瑞歩ちゃんも、これで愛くんから離れていったのだ。そしてお父さんは、愛くんをいい子だと言ってくれた。一緒にいてもいい、と言ってくれた。

これでもう、あたしと愛くんの間に障害はないわ。
嬉しくて、倫は笑いがこみ上げてきた。
くすくす。

明日からは愛くんに、何の遠慮もなく話しかけることが出来る。いつつも、ずっと一緒にいよう。うん。悪いお友達が近寄ってこないように、見張っていよう。愛くんの悩みを何でも聞いてあげて、そうして愛くんがいい子になれるよう、手伝ってあげるんだ。
くすくす。くすくす。

胸が、ドキドキしてきた。

こういうときは、落着くためにあれをするに限る。

そう思って倫は、勉強机の引き出しから、一番大事にしているカッターナイフを取り出すと、刃をカチカチと出し入れた。これがお気に入りなのだ。刃に蛍光灯の光が反射して鈍く輝き、とても綺麗だった。これをすると、心が静まる。刃の表面には、目を細める倫の顔が映っていた。

何度も、出し入れする。

カチカチ。カチカチ。カチカチ。カチカチ。

カチカチ。